

# ホームカミングデイ見学行事報告 1

## (旧三井家下鴨別邸の見学)

京都工芸繊維大学同窓会主催（近畿支部、滋賀支部衣笠会協力）で2017年11月24日に、ホームカミングデイ行事として、古建築見学会、学生クラブ活動激励会、懇親会が開催されました。その一つで、「旧三井家下鴨別邸」を訪問しました。参加の同窓会メンバーが2班にわかれ、デザイン建築学系の矢ヶ崎善太郎准教授や研究室の皆様の案内で見学。その際、主屋、望楼を背景にしました記念写真が左です。この日、作成頂きました資料は、平成25年卒業の村上玲奈様の卒業論文を編集、加筆された貴重なもので詳細、豊富な内容で、参考にと思い、報告致します。



### 旧三井家下鴨別邸の建築

旧三井家下鴨別邸は、下鴨神社の南に位置し、三井家十一家の共有の別邸として三井北家(総領家)第十代の三井八郎右衛門高棟(たかみね)によって建築された。この地には明治四十二年(一九〇九)に三井家の祖霊社である顕名霊社(あきなれいしや)が遷座され、その参拝の際の休憩所とするため、大正十四年(一九二五)に建築されたのが現在の旧邸である。約五千七百平方メートルの敷地に木造三階建ての主屋と平屋の玄関棟および茶室が建つ。建築に際しては木屋町三条上ルにあった三井家の木屋町別邸(明治十三年 一八八〇築)が移築され、そこに玄関棟が増築された。茶室はこの地が三井家の所有になる以前からここに建っていたものである。

昭和二十四年(一九四九)には国に譲渡され、昭和二十六年(一九五一)以降、京都家庭裁判所の所長宿舎として平成十九年まで使用された。主屋を中心として、大正期までに整えられた大規模別邸の屋敷構えが良好に保存されており、高い歴史的価値を有していることから平成二十四年に重要文化財に指定された。

### 1、三井家と顕名霊社

松阪出身であった、三井家中興の祖といわれる高利(たかとし 一六二二～一六九四は延宝元年(一六七三)、江戸と京都に越後屋呉服店を開いた。京都は西陣織などの仕入れを主な目的とした店で、それを江戸で売った。明治になって事業や一族の本拠が東京に移っても京都との関係は深く、菩提寺である真如堂では、定期的に法要や式典が開かれ、関係者が集まることもしばしばあった。 顕名霊社とは三井家の先祖代々の霊を祀る祖霊社である。三井家では主人ほか主要な関係者が死後百年を経過すると神として扱われ、みな祖霊社に祀られるならわしであった。享保元年(一七一六)江戸では向島に三囲稲荷神社社殿を造営し守護神とした一方、京都では呉服を扱う関係から、養蚕の神を祭る京都・太秦の木嶋(このしま)神社を信仰し、正徳三年(一七一三)に木嶋神社を三井家の祈願所としたのであった。宝暦元年(一七五一)には遠祖・高安らに神号を追諡し顕名霊社を勧請、つづいて安永九年(一七八〇)には木嶋神社境内の本殿横に顕名霊社社殿を建設した。 明治維新後は宗教政策などのありをうけ、顕名霊社の社殿は転々とするが、明治三十一年(一八九八)から同三十三年にかけて三井家は下鴨神社の南、賀茂川と高野川の合流点に広大な土地を購入し、明治四十二年(一九〇九)九月、高安の三百年遠忌に際し、ここに顕名霊社を遷座し、遷宮および霊社の合祀祭を盛大に挙行了したのであった。 なぜ遷座の地として下鴨神社の南の地が選ばれたのは詳らかでないが、その自然環境や立地の利便性などが考慮されたのは想像に難くない。一方、三井家代々が信仰していた木嶋神社の境内にある森は「元糺の森」と言われており、「嵯峨天皇の御代に下鴨に遷してより元糺と云う」(木嶋神社由緒札)の伝えは古来木嶋神社と下鴨神社の関連性を物語るものであり、三井家にとっても下鴨神社にほど近いこの地に深い愛着があったとしても不思議ではない。大正十一年に顕名霊社の改修工事が行われ、新たに拝殿や社務所などが建設され、九月に落成遷座式が盛大に行われた。その後大正十四年に祭礼の際の休憩所施設の必要から三井北家の木屋町別邸の建物が移築され、さらに増築を加えるなどの整備がなされ、それを下鴨別邸とした。

昭和二十三年(一九四八)に下鴨別邸の地が京都地方裁判所に譲渡された後、顕名霊社の社殿はいったん京都油野小路邸に移され、その後さらに雨虚曲折を経て、現在は東京向島の三囲神社境内に移転され現存している。 顕名霊社を下鴨に遷座し、同所に別邸を開いたのは三井家十代当主・三井高棟(たかみね 一八五七～一九四八)であった。代々の当主のなかでも一流の趣味人として知られ、東京今井町の邸宅には能舞台なども設けた。現在は国宝に指定されている茶室「如庵」を京都から移築したのも高棟であった。

### 2、主屋

木造三階建、入母屋造および宝形造葺瓦葺で、軒先の一部に銅板を葺いている。一・二階とも南側に設けたけた庭園に面して座敷を配し、庭園に対して開放的なつくりである。三階には望楼が設けられ、鴨川や東山の眺望を楽

しむことができる。望楼はこの建築にとって外観上重要な意匠にもなっている。

先述のように、主屋は木屋町三条にあった三井北家木屋町別邸を移築したものであった。その木屋町別邸とは明治十三年（一八八〇）に北家八代高福の隠居所として建設されたもので、木屋町三条上る東側上大阪町521番地にあった。木屋町から鴨川に達する奥行き深い敷地で、木屋町通りに面した六間半ほどの間口を持つ大規模な邸宅であった。表側に土蔵を配し、その脇から奥にいたるアプローチを進むと玄関があり、その奥に望楼を含む三階建の主屋が建っていた。一階の奥には鴨川に面して八畳と六畳の主座敷が並んでいた。古図面や古写真などを比較すると、この主座敷を主体とした部分そのまま下鴨に移築されていることがわかる。下鴨に移築後、北寄りに台所などが増築されて現在に至っている。鴨川から望むことができた望楼付きの風雅な建築そのまま下鴨に再現されており、庭越しにその風情をしのぶことができる。

三井高福と後継の高朗は茶の湯に深い造形深く、高福は表千家の皆伝を受けている。明治十九年（一八八六）以降は家元・千宗左が木屋町別邸に来訪し、ここで茶の稽古は行われていたほどであったというから、それにふさわしい茶のための設備もそなわれていたのであろう。

戦前期にさかのぼる旧財閥の邸宅遺構として貴重な建築であり、数寄的な性格をもつ近代の大規模な和風邸宅として後世に伝えることの意義は大きい。

ちなみに小座敷の杉戸に描かれた孔雀牡丹は原在中の長男、在正の作である。岩上から後ろを振り返る姿や降りたたんだ尾羽根の質感、また牡丹の葉脈など、繊細かつ正確な描線と美しい採色で表現されている。

### 3、玄関棟

入母屋造り平屋で棧瓦葺。西を正面とする。移築した主屋の玄関として当地で増築された建物である。内部は書院造を基調とするが、天井を高くし、床に絨毯を敷き、椅子座の洋式居室として使用された。軒高（桁までの高さ）が高く、伝統的な和風の木割とはいささか異なる姿をしめしている。設計に際して建築家の介入をうかがわせる。

### 4、茶室

入母屋造平屋で、棧瓦葺きで一部軒先を銅板で葺く。庭に面して三畳次の間が付いた四畳半の座敷があり、その北側に一畳台目の小間と水屋を配する。開放的で、伝統的な草庵の茶室にない独創的な窓の意匠などが印象的である。茶の湯（抹茶）に限らず、多様な茶にも対応できる茶室であったと考える。

この茶室は木屋町別邸の建物が現地に移築される以前からここに建っていた。現状で主屋と軸がふれているのもその所以であると理解できる。小屋浦から慶応四年（一八六八）銘の祈禱札が見つかっており、材などを目視する限りでは江戸後期以前にさかのぼる建築である可能性が高い。

### 5、造営に関わった人物

下鴨の地における頭名霊社の社殿建設には技師として**佐々木岩次郎**がかかわっていた。嘉永6年（一八五三）京都に生まれた佐々木岩次郎は木子棟齋などに師事して神社仏閣の建築を習得し、明治の東本願寺再建には、頭領・木子棟齋の補佐役として、設計および工事監督に従事していた。内務省囑託として古建築の調査や保存修理にも関わり、日英大博覧会東京館の設計監督として渡英するなど内外で活躍した。大正6年（一九一七）には帝室技芸員に迎えられている。同十一年に佐々木建築事務所を開設して設計業務に専念することになった。伊藤忠太との仕事も多く、東京芝の浅野総一郎邸や京都の平安神宮の建設にも二人の名が見える。三井家とのかかわりは頭名霊社の設計を機に深くなっていくようである。

頭名霊社の建設に棟梁として名を連ねているのは三上吉兵衛である。三上吉兵衛は京都で代々「吉兵衛」を襲名する工匠の家柄で、『京都案内都百種』（一八九七）には「和様家屋宮殿建築宮内省御用達」とある。個人邸宅や公共建設にも業績おおく、桂離宮や京都御苑内の建築修理などにも実績がある。佐々木岩次郎と三上吉兵衛とは仕事の上で関りは深く、二人の協働になる建築としては大正三年（一九一四）京都迎賓館和館（現存せず）や昭和八年竣工の京都嵐山法輪寺の多宝塔など数多い。

玄関棟には大正十三年銘の棟札が残されており、下鴨別邸造営における玄関棟の増築に際しては工事監督・佐々木芳太郎、棟梁・**磯井儀三郎**が関わっていたことがわかる。佐々木芳太郎と同性の岩次郎との関係は詳らかでないが、玄関棟にみる伝統とは異なる木割からなるプロポーシヨンの出現には設計者である芳太郎の造形感覚が反映しているのかもしれない。磯井儀三郎は下鴨別邸に限らず、京都における三井家の建築に多くの名を残している。いわゆる三井家出入り関係をもった大工棟梁であったと考えられる。

下鴨別邸の建設に深く関わった人物として、施主である三井高棟の存在を忘れることはできない。日本近代の一流の趣味人、数寄者として培った造形感覚をもって建築・庭園の造営に深く関わっていたことは言うまでもない。三井家に伝わる『日誌』から、造営期間中には下鴨を訪れ、佐々木岩次郎や三上吉兵衛と協議を重ねており、特に木屋町別邸の移築設計に関しては多くの意見を述べていたことがうかがえる。

#### ※参考文献

村上玲奈『近代における三井家の建築に関する研究 ―三井家下鴨別邸を中心に―』

（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 博士前期課程 造形工学専攻 平成二十五年度修士論文）

上記の村上氏論文の内容から見学会資料にふさわしい部分のみを抜粋し、いささかの私見を交えて、加筆したものであるとの、矢ヶ崎善太郎准教授談

（写真・編集 近畿支部 河島 博）